



「創立者命日(逝去記念日)」

10月10日は、本学院創立者八代斌助の53年目の命日です。創立者と聞いても学生の皆さんには、今ひとつピンとこないかも知れませんね。

学校法人(私立学校)というのは「私はこういう人材を育てるために学校を創りたい!」と志篤く学院設立を決意した人に賛同した人々の「寄附行為」によって建てられた学校のことを言います。

しかしながら八代斌助の場合は事情が少し異なっており、八代学院を設立した1963年にはすでに東京の立教学院、聖路加国際病院・大学、大阪の桃山学院、神戸松蔭女子学院などの理事長や学院長を兼務していたので、終生懇意にさせて頂いた三笠宮殿下や当時の神戸市長から「そろそろご自分の学校をお創りになりませんか?」と薦めて頂いて設立した経緯があります。

そこで自分なりにこういう人材を育成したいとの祈りと願いを込めて考えた建学の精神が「神を畏れ、人を恐れず、人に仕えよ」でした。

それに加えて創立者の人生は波乱万丈で、北海道は函館生まれの釧路育ちと大自然の中ですくすく成長したせいか、旧制釧路中学校を卒業した後「息子は私の後を継がせて牧師にする」と言ってきかない父親の厳命で、立教大学キリスト教学科(予科)に入学しました。けれども北海道の大自然で育った青年が、いきなり大都会の池袋に放り出されて順応するはずもありません。案の定大学2年生の時に問題を起こして退学処分となり、最終学歴は釧路中学でした。

そんな創立者も紆余曲折はありましたが、父欽之允(きんのじょう)の転勤に伴い神戸教区に移りました。そこで人生最大の恩師バジル主教と出会うのですが、バジル主教は八代斌助と関わる中で「彼は若くて元気で仕事もよく出来るが、霊性(スピリチャリティー)に欠けている」と一瞬で見抜き、1927年に斌助をイギリスのケラム神学校へと留学させました。留学時代の逸話もたくさんありますが、ここでは割愛します。

2年後、バジル主教の期待に答えて、斌助は Spirituality、Devotion、Discipline といった牧会者としての祈りを中心に据えた信仰生活を身に着けて帰国しました。そして太平洋戦争勃発直前、イギリスに帰国したバジル主教の後を受けて第3代神戸教区主教となりました。八代斌助が主教になってすぐ日本は連合国との戦争に突入するのですが、戦前・戦中・戦後と苦難の時代を乗り越え、また戦後日本の外務省が機能していない状況下にあって、民間パスポート第1号を手にしてかつての敵国や戦場となって大きな損害を与えたアジアの国々を巡り、和解の使者としての働きが評価されて、イギリスのオックスフォード大学、アメリカのコロンビア大学、カナダのトロント大学等から名誉博士号を授与されました。

こうした創立者自身の経験ゆえに、狭い日本に留まらず世界で活躍する国際的な人材育成を、学院の第2の教育目的として決めました。このような経歴をもった創立者と理事によって建てられた学校、それが今皆さんが学んでおられる神戸国際大学なのです。

そして10月10日は創立者の命日なのです。

これからも本学で学ばれる学生の皆さんが、創立者に負けないぐらい世界に羽ばたいてご活躍くださいますよう祈ってやみません。

願わくは主を信じてこの世を去りし主教ミカエル八代斌助の魂、
主のみむね深く安らかに憩わせたまわんことを。 アーメン

